

北海道社会福祉協議会

北海道中国帰国者支援・交流センター 〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目一番地かでの2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp/> E-mail: hokkaidocenter@dosyakyu.or.jp

着任のあいさつ

北海道中国帰国者支援・交流センター所長 富田 彰



4月からセンター所長に着任した富田です。以前にも、令和元年度に1年間だけ、所長を務めていました。またセンターの仕事を担当することができて嬉しいです。

私が所長を務めていた時の終わりの頃に、新型コロナウイルスの感染が流行し始めました。ウイルスにはまだまだ気を付けなくてはなりませんが、もうみんなが集まって交流したり、みんなでお出かけしたりすることが、以前と同じように自由にできるようになりましたね。センターでは、今年度もみなさんが楽しく参加できる教室や行事を

用意していますので、ぜひご参加ください。きっと、生活に“潤い”や“張り”が出てくると思います。私もできるだけ一緒に参加して、みなさんと楽しく過ごせたらいいなと思っています。

一世のみなさんは、老後の生活や健康のこと、二、三世のみなさんは、お仕事のことや進路のことなど、生活の心配ごとも多いかと思います。センターがみなさんのお力となれるように、所長として頑張りたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひします。

退任のあいさつ

北海道中国帰国者支援・交流センター前所長 加藤 欣也

この度、3月をもって退任させていただくことになりました。

2年前、まだコロナウイルスの先行きが見えない中、この席に座り、初めてのことに戸惑うことも多々ありましたが、関係機関や地域住民のみなさんのご協力、そして職員のがんばりで何とか各種の事業を行ってこれたかな、と思っています。

この間、夏の暑さにも冬の寒さにも負けず、元気にセンターに通ってこられた帰国者のみなさんに、私が元気をもらって過ごさせていただきました。帰国者のみなさん、これからも健康に留意され、永くセンターに通ってくださいね。また講師のみなさん、職員のみならず体調に気を配り、今後とも帰国者のために、それぞれの立場で必要な支援を頼みます。

私は前職と合わせて45年、仕事人生を歩んできましたが、最後にこのセンターで勤務させていただき、多くの人とお会いできたことに心から感謝して、お別れの言葉とさせていただきます。

本当にありがとうございました。



戦争がもたらしたものは



2月3日、かでの2.7の大会議室にて「中国・樺太帰国者を知る集い」を開催しました。一般市民のみなさん51名が集まり、帰国者によるスピーチと、語り部による樺太等残留邦人の生涯についての講話に耳を傾けました。あまり知られていない樺太残留邦人について学び、戦争がもたらしたものについて考える機会となりました。

帰国前の生活について日本語でスピーチ

第一部は、当センターの日本語教室に通う4名の樺太帰国者のみなさんが帰国前のサハリンでの生活について日本語でスピーチをしました。今回語られたのは、みなさんが経験してきたことのほんの一部だと思いますが、日本で生まれ育った私たちにとっては、とても興味深く、貴重なお話でした。今の生活を楽しみ、周囲に対する感謝を表現していたことも印象的でした。



富永富子さん
「夢だった日本」

サハリンにいたときに両親を失いますが、一時帰国をきっかけに親族が見つかり、2001年に永住帰国。今は大勢の家族と友達がいって幸せ、と語りました。



宇藤珠子さん
「私の母は樺太残留邦人」

34年間続けてきた植物の研究をやめ、お母さんと自身の息子とともに永住帰国。お母さんが亡くなるまでの10年間日本で暮らせてよかったと語りました。



康田ユリ子さん
「忘れられない思い出」
2歳のときに日本人の医師によって一命を取り留め、自身も看護師となり、医療に従事しました。看護師時代のエピソードを披露。



横田レイ子さん
「サハリンでの暮らし」
日本人同士で助け合いながら生活した子ども時代の思い出を語りました。永住帰国後もたくさんの人に支えられ、感謝しているといます。

戦後世代の語り部、残留邦人問題を今に伝える

第二部は、戦後世代の語り部太田満さんによる講話「旧ソ連残留日本人の戦後～伊藤實さんの人生から～」のビデオが上映されました。樺太等残留邦人である伊藤實さんの苦難の生涯が語られました。

伊藤實さんは、1927年山形県生まれ。樺太で鉄道機関士をしていた1946年のある日、疲れのために居眠りをしてしまい、あやうく前の汽車にぶつかりそうになってしまいます。逮捕され、シベリアで強制労働をさせられた後、カザフスタンに送られました。1989年に日本大使館に出した手紙によって日本の親族と連絡がとれ、1997年に遂に永住帰国するまで、貧しさや戦い、自身の家族のために働き続けた日々でした。

太田さんの講話は、伊藤實さんの体験を過去のこととして完結させることなく、帰国者の戦後が今も続いていることを示唆し、聞く人に考えることを促すものでした。



語り部太田満さん（写真は2022年のもの）



伊藤實さん（撮影 太田満）

太田満さんは、14名いる戦後世代の語り部の中で樺太等残留邦人について語る唯一の語り部です。もとは中国残留邦人に関心を持っていたそうですが、サハリンからの帰国者と出会い、「残留者の体験をこのまま『知られざる歴史』にしてよいのか」という思いから樺太等残留邦人の体験を語ることを決心しました。残念なことに、昨年太田さんは亡くなられ、今回の講話はビデオ上映となりました。現在、語り部の仲間たちが太田さんの語りを引き継ぐと準備を進めています。

「中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部育成事業」について

戦後世代の語り部育成事業は、中国残留邦人等の体験を歴史の証言として記憶し、次世代へ語り継ぐことを目的に、2016年より始まりました。戦後79年が過ぎ、中国残留邦人等について知らない人が増えています。特に樺太等残留邦人については知られていません。残留邦人のみなさんは、高齢化に加えて言葉の問題などで自身の体験を語る事が難しい状況にあります。

首都圏中国帰国者支援・交流センターでの3年間の研修の中で、語り部を志望するみなさんは残留邦人に聞き取りを行い、研修終了後、講話活動を行います。これまで自治体、市民団体、学校、大学等で講話活動を行ってきました。全国からの依頼に添えて、無料で語り部を派遣しています。

お問い合わせ先：首都圏中国帰国者支援・交流センター TEL 03-5807-3171



長い間ありがとうございました！

「いつまでも元気に歌いつづけて」

令和5年度をもって「みんなで歌おう！」教室の菊岡俊子先生、増子捷二先生のお二人が担当を退くこととなりました。増子先生は8年、菊岡先生にはセンター開設当初から16年担当していただきました。お二人の最後の教室では、いつまでも名残を惜しむ帰国者の姿がありました。「歌はいくつになっても続けられます。いつまでも元気に歌い続けてください」との言葉が最後に先生から贈られました。

ともに歌い、ともに歩んで

菊岡 俊子

北海道中国帰国者支援・交流センターが開設された当初から「みんなで歌おう」教室を担当させていただきました。

中国残留邦人については、肉親捜しが行われていた当時のテレビニュースや新聞紙面などをおして知り、肉親との再会の様子を、ドラマを見ているような気持ちで涙を流して見ていました。教室を担当することになり、まずは準備運動をしてから発声練習、そして童謡や流行歌(歌謡曲)の日本語の歌詞をみんなで読んで、意味を理解しながら歌っていきました。

コロナ禍では休講になったり、歌わずテープを聞いたりして進めましたが、今ではまた一緒に歌えるようになり、振りの付いた曲も楽しく練習しています。

歌を教えるだけではなく、帰国者のみなさんの生き抜いてきた環境を理解し、月日の流れとともに自然な形で交流は深まり、みんな家族のようになりました。

新年度も新しい先生とともに大きく羽ばたいてください。私自身、これほど長く担当するとは思っていませんでしたが、みなさんの明るさと強さに長い年月を支えられ、よい思い出の1コマを作ることができました。どうぞ、これからもお元気で！

編集後記

伊藤實さんの人生において、居眠りをしたことが苦難の始まりであったと言えるかもしれません。けれども、だからこそ自分たちがいるのだと、伊藤さんの子どもたちは感謝していると言います。様々な体験を経た帰国者のみなさんが感謝という言葉の口にするとき、本当に心を打たれます。



みなさんの笑顔に励まされて

増子 捷二

「伴奏の手伝いをしてくれませんか」と菊岡先生に言われたのが、北海道中国帰国者支援・交流センターの「みんなで歌おう」サークルに参加したきっかけでした。私は当初「中国残留邦人」のことも、ましてや「樺太残留邦人」のこともよく知らず、文化祭や新年交流会に楽しく参加していましたが、「中国・樺太帰国者を知る集い」に参加して衝撃を受けると共に、そういった事情を知らないでいたことを大変恥ずかしく思いました。

特に、本人の責任ではないのに過去に過酷な人生を送ってきたことと、帰国してからも大変な日々を過ごしているのに、明るく笑顔で前向きに生活されていることに大変敬服しました。

みなさんの笑顔と明るいうたごえに囲まれて、毎回の例会が楽しみでした。「みんなで歌おう」の担当を離れても、何らかの形でみなさんの応援を続けていきたいと思っています。